



新妻【贖罪】

私は牝になる

北都凜

挿絵／三 頭人

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	穢された口唇	4
第二章	奪われた貞節	41
第三章	閨房での狂宴	81
第四章	招かれざる客	124
第五章	覗かれた密戯	164
第六章	身も心も……	208
エピソード	……	252

登場人物

Characters

藍沢 美帆

(あいざわみほ)

モデルと見まがう抜群のプロポーションをした二十六歳の若妻。お嬢様育ちのお淑やかな性格ながら、芯は強く、真っ直ぐな正義感を持っている。

藍沢 晃司

(あいざわこうじ)

美帆の夫で、会社に勤める三十八歳。長身で甘いマスクの爽やかな外見。

酒井 八郎

(さかい はちろう)

肥満体で頭頂部が薄い四十六歳。不動産屋を経営しており、美帆たちの住むマンションを管理している。

酒井 綾乃

(さかい あやの)

八郎の妻。濃いメイクで、香水の匂いを漂わす妖艶な雰囲気のある三十四歳。



しかし、酒井は不気味な唸り声をあげて剛根をビクつかせるものの、いっこうに達する気配を見せない。スピードアップした手コキで感じているのは間違いないが、そう簡単に果てる気配はなかった。

「おおうつ……奥さん、すぐく気持ちいいですよ。ぜひ旦那さんにもやってあげてください。きつと泣いて悦びますよ」

「やめてください……主人は……違いますから……」

「フハハハッ、これは愉快だ」

消え入りそうな声で抗議すると、酒井はさも楽しそうな笑い声を響かせた。

肉棒を握り締めたまま、思わず怪訝そうな目で男を見あげる。夫を馬鹿にされたような気がして、なんともいえない屈辱感が胸のうちにひろがっていく。

「おっと、これは失敬……でも、奥さん。男なんていうのは、みんな似たり寄ったりですよ。いい女を見たら犯りたくなる。それが男ってもんです」

酒井は勃起したペニスをヒクつかせながら言う、目の奥をギラりと光らせた。

「男だけじゃないですよ。逞しいチンポを目の前にしたら、どうしてもしゃぶりたくなる。それが女の哀しい性ってもんですよ」

「な……なにを……仰っているのか……」

嫌な予感がして頬を引きつらせる。精液のおぞましい苦味が口内によみがえり、拒絶するように唇をギュッと閉じていた。

「手コキじゃ射精できそうにないですな。おしゃぶりしてもらいましょうか」

さらなる要求を突きつけられて、絶望感に目の前が真っ暗になる。また卑猥な行為を強要されるのかと思うと、それだけで涙がじんわりと滲んでしまう。

「いや、無理です……それだけは、もう……」

「ご主人の会社に電話をかけてもいいんですよ。示談のお話をするついでに、奥さんがシックスサインでイットたことも教えてあげましょうか？」

「そ、そんな、やめてください……」

酒井は決して声を荒げない代わりに、粘着質な口調でねちねちと脅してくる。美帆はどうしていいのかわからず、視線をそらして黙りこんだ。

（もし、晃司さんに知られてしまったら……）

初めて体験したエクスタシーを思いだし、耳まで真っ赤に染めあげる。

あの気が狂いそうな快感は、屈辱の記憶とともに下腹部の奥にしっかりと刻みこまれていた。おそらく死ぬまで一生忘れることはないだろう。

しかし、身体が宙に浮くような絶頂感が愛する夫に与えられたものだったら、まっ

たく別の感想を抱いていたかもしれない。肉という肉が蕩けていく愉悅は、初心な新妻を恍惚とさせるには充分すぎる感覚だった。

「さあ、フェラチオするんですよ。奥さんの口で気持ちよくしてください」

酒井のくぐもった声が、耳の穴にねっとり流れこんでくる。

（お口でなんて……そんな、はしたないこと……ああ、晃司さん……）

とにかく夫を落胆させたくなかった。卑劣漢に股間をしゃぶられて気をやったことなど、絶対に知られるわけにはいかない。夫を愛しているからこそ、酒井の命令に逆らえなくなっていく。

「どうせなら、そこにひざまずいてフェラしてもらいましょうか」

酒井はストラックスとトランクスを一緒に脱ぐと、大きく股を股を開いてソファァーにふんぞり返った。そして怯える人妻の目をじっと見据えて、早くしろとばかりにペニス揺らすではないか。

「や……ど、どうしても……しないと駄目なんですか？」

美帆はひとり言のようにつぶやいてソファァーからおり、ストッキングに包まれた両膝を絨毯についた。男の臍から太腿にかけては毛むくじゃらで、生理的な嫌悪感が湧きあがってくる。でも、今はそんなことを気にしている余裕はなかった。

黒いバットののような太幹の根元に指を添えると、何度も躊躇しながら上半身をゆっくりと伏せていく。

「うっ……」

中年男の股間に顔を寄せただけで、強烈な臭気が鼻の粘膜を刺激する。パンパンに張りつめた亀頭の先端は、先走り液にまみれて淫らな光を放っていた。

「昨日もやったからわかりますね。できるだけ奥まで啜るんですよ」

「ああ、ひどいわ……んむっ」

思いきって唇を押し当てると、ヌチャと湿った音が響いて鳥肌が立つ。腰が引けて逃げだしたくなるのを必死にこらえながら、ツルンとした表面を滑らせるようにして巨大な肉の実を呑みこんでいく。

「ううっ……むふうううっ」

途端に男性器特有の生臭さが口内いっぱいにひろがり、反射的に嘔吐感がこみあげられる。それでも太幹に指を絡めて、自分の意思で肉塊を啜えこんだ。

（気持ち悪い……いやです、こんなの……）

押さえこまれて無理やりしゃぶらされるのとは違う屈辱が、貞淑な新妻の胸を掻き乱す。またしても夫を裏切ってしまったという思いに駆られて、双眸から大粒の涙が

溢れだした。

「よくできましたね。でも口に入れただけでは射精できませんよ。唇で締めつけながら首を振ってください」

計画どおりに事が運んで上機嫌な酒井が、居丈高に勝手なことを命じてくる。悔しいけれど無視するわけにはいかず、ゆっくりと首を前後に動かしていく。

「ン……ンン……うンンっ」

肉竿を唇で摩擦すると、火傷しそうな熱気が伝わってくる。膨張しきって黒光りする屹立は、まるで馬のペニスのように巨大だった。

「いい感じですよ。唇で唾液をまぶすように……そうです、気持ちいいですよ。舌も使ってみましょうか。飴玉を舐める感じでペロペロしてください」

要求はさらにエスカレートするが、弱みを握られているため従うしかない。

震える舌先を伸ばして、口内の亀頭にねっちよりと押しつけていく。先走り液で又める感触はあまりにも気色悪く、磯のような生臭さに吐き気がこみあげる。

(もういやです……せめて早く終わってください)

化け物のような肉塊を唇で刺激して、しかも舌まで使って卑猥に舐めまわす。愛する夫にさえしたことがない淫ら極まりない奉仕を、愛情の欠片も抱いていない中年男

に施していた。

「おうっ、いい感じですねえ。その調子でお願いしますよ」

酒井は先ほどから同じような言葉を繰り返して、気色悪い呻き声をもらしている。しきりに奉仕をうながしてくるが、いっこうに射精する気配を見せない。ただ人妻のフェラチオに恍惚となり、大量のカウパー汁を垂れ流していた。

「綺麗な黒髪ですね。あなたのように若くて真面目な奥さんが、私の臭いチンポをしやぶってくれるなんて夢みたいですよ」

髪を撫でられるおぞましさに、背筋がゾクゾクッと寒くなる。それでも中断するわけにはいかず、懸命に首を振って極太の肉竿に舌を這わせていった。

「おうっ……おふっ……むふううっ」

息苦しさと顎の痺れに悩まされ、全身にじつとりと汗が滲んでいく。

そもそも経験豊富で百選錬磨の酒井が、そう簡単に射精するはずがなかった。昨日はフェラ初体験ということで多少手加減していたのだが、そんなことを初心な新妻が知る由もない。

（どうして終わってくれないの？ く、苦しい……もう、駄目……）

途方もなく巨大なペニスの魔力なのか、それとも単に酸欠状態に陥っているだけな

のか、とにかく頭が朦朧となり卒倒してしまいそうだ。凄まじいまでの牡の力強さを実感し、自分がか弱い牝でしかないとを思い知らされていた。

「むはあつ……ハア……ハア……」

疲れきってペニスを吐きだすと、華奢な肩を激しく喘がせる。額には玉の汗が浮かび、前髪が数本張りついていた。

「おや？ 勝手にやめたら駄目ですよ。家内が退院するまでは、奥さんが性欲の処理をする約束じゃないですか」

酒井の声は聞こえているが、今は呼吸を整えるので精いっぱいだ。男の大きく開かれた脚の間にうずくまり、がっくりとうなだれて荒い息を吐き続ける。

「す……少し……休ませて、ください……」

とてもではないが、今すぐ長大なペニスを呑めることはできない。無理に再開すれば、きっと酸欠で倒れてしまうだろう。

「そうですか。奥さんができないのなら、私が自分でするしかありませんな」

酒井はしゃがみこんでいる人妻を見おろして、ニヤリと妖しい笑みを浮かべた。

そして、ゆっくりとした動作でソファから立ちあがり、苦しげに喘ぐ女体を絨毯の上に押し倒していく。

「あつ……さ、酒井さん、なにを——きゃっ！」

いきなりスカートをまくりあげられたかと思うと、太腿に張りついたストッキングを摘まれる。嫌な予感に慌てて身を振るけれど、酒井は舌なめずりしながら爪を立ててしまう。

「お疲れのようなので休ませてあげますよ」

「いやあああつ！ やめてください、あああつ、やめてえっ」

ストッキングを破られるビリビリという音が、嫌でも被虐感を煽りたてる。美帆は怯えた瞳で男を見あげて、絨毯の上を後ずさりした。

「私は自分で勝手に性欲の処理をしますから、どうぞお気になさらずに」

酒井が汗にまみれたポロシャツを脱ぎ捨てる。贅肉をたっぷり湛えた肥満体は、注視できないほど醜かった。しかも、その股間には黒光りする肉の凶器が隆々とそそり勃っているのだ。

（そんな……このままだと、私……）

唇から血の気が引いて、痙攣するように小刻みに震えていた。レイプされるかもしれないという恐怖が、新妻の精神を極限状態へと追いこんでいく。

「ひっ……い、いやです！」

思わず眉根を寄せて顔を背けた。しかし、ペニスの残像はしっかりと網膜に刻み込まれている。男の汗の匂いと先走り液の生臭さが混ざり合い、吐き気をもよおす汚臭となつてリビングにひろがっていた。

「フフフッ、そんなに嫌わなくてもいいじゃないですか。誰でも最初は奥さんと同じ反応をしますよ。最初だけはね」

酒井はパンティの股布を脇にずらして陰唇を剥きだしにする。そして、下肢を大きくM字型に押し開き、亀頭をねっちよりとあてがってきた。

「ひいっ、だ、駄目っ、待ってください、それだけは絶対に駄目ですっ」

股間を晒す羞恥よりも、レイプの恐怖のほうがはるかに勝つてた。慌てて身を振るが、肩をがっしりと押さえつけられては逃げられない。

「や、やめてください……くううっ、しないって言ったのに、約束が違います」

男の胸板に手のひらをあてがい全力で押し返す。しかし、脂肪だらけの巨体は一ミリも動かなかつた。

夫の力になりたくて、中年男の性欲処理をすると決めた。だが、あくまでも射精の手伝いであり、当然ながらセックスをするつもりなどなかつたのに……。

(晃司さん、助けてください……晃司さんっ)

愛する人の名前を、心のなかで何度も呼んだ。だが、接待ゴルフに出かけている夫が、この時間に帰宅する可能性は限りなくゼロに近かった。

「奥さんも楽しめばいいんですよ。クンニでイクよりも、ずっと気持ちいいことを教えてあげます。きつとクセになりますよお」

酒井は下卑た笑みを浮かべて、陰唇に重ねた剛根をねつとりスライドさせた。

獐猛な牡の生肉の熱気が伝わり、敏感な合わせ目がカッと燃えるような感覚に包まれる。カウパー汁がニチャニチャとねちっこい水音をたてて、卑猥な雰囲気をもたらしに盛りあげてしまう。

「あうっ……や……あううっ」

夫以外と経験のない美帆にとつて、他人のモノを受け入れるなど考えられない。しかも、女の源泉にあてがわれている禍々しい巨大なペニスには、避妊具なしで大量の先走り液を垂れ流しているのだ。

じつは、愛する夫とするときもコンドームを装着していた。一戸建てを購入するまでは、子供を作らないと決めている。それなのに、今まさに陵辱者のモノを生で挿入されようとしていた。

「お互いすっかり濡れてきたことだし、そろそろ繋がりましょうか」

「いやですつ、それだけは……晃司さん、助けてください——」

酒井の目が異様にギラつき、腰をグイッとばかりに押し進められる。と、次の瞬間、ついに亀頭の先端が媚肉の狭間に埋没してしまう。

「ひいいいッ！ やめ……あううッ、いやっ、痛っ……挿れないでえっ」

「すぐにこれが大好きになりますよ。私の極太チンポがね」

カウパー汁でコーティングされた肉亀が、強引に膣肉を掻きわけてくる。まだ先端だけなのに、夫のモノを根元まで挿入されたとき以上の衝撃だった。

「くはっ……うっ……うはっ、や、裂けちゃう……」

「身体から力を抜いてください。力んでるから痛いんです。深呼吸しましょうか。ゆっくり息を吐きだして……ほおら、ゆっくり挿れてあげますからね」

恐ろしさのあまり、男の言うとおりに細く長く息を吐きだしていく。

途端に夫とは比べ物にならない巨大なペニス、ズルズルと膣に押しこまれてしまう。初めて避妊具なしで受け入れたのは、愛する人のモノではなかった。

（そんな……私、汚されて……ああ、もう死んでしまいたい……）

考えるほどに悲しさが倍増して、涙腺が壊れたように涙が溢れだした。

「ううっ、いやです……あふっ、苦し……うっううっ」

嗚咽をもらしながら拒絶の言葉を絞りだす。すると酒井は挿入を中断して、シャツのボタンを上から順にはずしはじめた。あつという間に前がはだけると、ブラジャーを押しあげられて双乳がプルルンッと剥きだしになった。

「あつ、いや、やめて……もう脱がさないでください——くうっ、駄目えっ」

思わず両手で胸を覆うが、手首を掴まれて簡単に引き剥がされる。お嬢様育ちの美帆が敵うはずもなく、抗えば抗うほど男を悦ばせてしまう。

「ずいぶん苦しそうですね。旦那さんのチンポはよっぽど小さいのかな？ でも、極太に慣れたら病みつきになりますよ」

酒井は双乳をねつとりと揉みしだき、指先で乳輪をいやらしくなぞってくる。途端にむず痒いような感覚がひろがり、美帆は切なげに身を振らせていた。

「あつ……や……ンンっ……や、やめて……いやです……」

「やはり敏感ですなあ。オッパイが感じるんでしょう？」

「そ、そんなこと、はうっ……ンうっ……いやあ」

柔肉に指をめぐりこませては、決して乳首に触れることなく焦らすように乳輪だけを刺激してくる。その微妙にポイントをずらした愛撫が焦燥感を煽り、嫌でも昨日の記憶を呼び起こす。

(あんなこと、思いたしたくないのに……ああ、いやです)

下唇を噛み締めていやいやをするけれど、おぞましくも蕩けるような快美感を忘れることなどできるはずがない。性的に未成熟な美帆にとって、初めての絶頂はあまりにも衝撃的な体験だった。

「ん？ 触ってないのに乳首が勃ってきましたよ」

「う、嘘です……そんなこと——ひゃうっ！」

否定しようとした声、思いがけず裏返った嬌声に変化する。いきなり乳首を摘まれて、鮮烈な快感電流が走り抜けたのだ。

「ほら、奥さんの乳首、こんなに硬くなってるじゃないですか。いつもと違うチンポを挿れられて興奮してるんですか？」

「い、いやです……ンンっ、興奮なんて……あうっ、触らないでください」

胸を弄る手を払おうとするけれど、女の力ではどうにもならない。左右の乳首を執拗にクニクニと転がされて、ますます硬く尖り勃ってしまう。

(やめて、弄らないで……そんなに乳首ばかり……)

たまらず眉根を寄せて嫌悪感に身悶えるが、中年男はいつまで経っても粘着質な愛撫をやめようとしなかった。



男の視線を感じながらワンピースを脱ぎ、恥じらいつつもブラジャーをはずす。まろびでた乳房を隠すように前屈みになり、ゆっくりとパンティをおろしていく。すると、濡れそぼった蜜壺からローターがヌルリと滑り落ちた。

「ンンンっ……」

思いがけず色っぽい鼻声もれて赤面する。嚙られ続けていた媚肉はビクビクと震えて、驚くほど大量の華蜜にまみれていた。

「ほお、大洪水じゃないですか。かなり興奮されていたようですね」

畳の上で震える淫具を摘みあげると、酒井はさも嬉しそうにつぶやいた。

「ああ……言わないでください……」

美帆は双眸を潤ませながら、耳まで染まった美貌をうつむかせる。ようやくローター責めから解放されたが、燃えあがった肉体まではどうにもならない。むしろ肌を晒したことで、ますます疼きが大きくなったような気がする。

（いやだわ、私したら……この身体、どうなってしまうの？）

美帆は自分の裸体を強く抱き締めると、眉を切なげにたわめていく。中年男に無理やり開発されたことで、はしたなく欲情するようになってしまった。

「恥ずかしいです……こんな格好……」

無意識のうちにくびれた腰をくねらせる。すると大きくてごつい手が腰にまわされて、部屋に備えつけの風呂場へと連れていかれた。

「バスルームだけ改修したんですよ。ここが汚かったら商売になりませんからね」

酒井が言うように、ひなびた旅館に似つかわしくないほど浴室は綺麗だった。タイル張りで洗い場が異様に広く、ビニール製の奇妙なマットが置いてある。空気を入れて使うゴムボートのような、厚みのあるシルバーのマットだった。

「これはソープランドで使用されてるマットです。見るのは初めてですよね？」

美帆が顔を引きつらせながら頷くと、酒井は満足そうな笑みをもらしてマットにお向けになる。そして、すぐ横に置かれている洗面器を手渡してきた。

「あ、あの……これは？」

洗面器にはどぎついピンク色の液体がたつぷりと入っている。なにやらトトロトとしており、いかにも卑猥そうな雰囲気漂っていた。

「ローションですよ。プレイに必要な物は、電話一本で女将が用意してくれます。ほら、そこにも道具があるでしょう」

シャンプーやリンスのボトルに並んで、男根を模した禍々しいバイブレーターが置いてある。シリコン製の黒い男根は、酒井のモノに迫るくらいの巨根だった。

「やつ……怖い……」

美帆はローション入りの洗面器を持ったまま、恐ろしい現実から視線をそらすように顔を背けた。いやらしいマットも、おぞましい淫具も、中年男の醜い肥満体も、なにも見なかったことにしたかった。

「フフフッ。初々しくて可愛いですね、奥さん。ソープ嬢のテクニクを、順を追って教えてあげます。なにも怖がることはありませんよ」

「し、知りたくありません……」

消え入りそうな声で拒絶するが、酒井は構わずに話し続ける。

「今日はローションプレイを覚えてもらいます。でも、こと細かに手順を覚える必要はありません。なんとなくのほうが素人っぽくて受けるんです」

話の主旨がまったく見えてこない。ここに来てからの酒井の言動は、腑に落ちないことばかりだった。

「男を悦ばせるテクニクを身に着けておけば、そのうち役に立ちますからねえ」

「酒井さん……どういう意味、ですか？」

恐ろしかったが確認せずにはいられない。この宿では売春も行われていると言っていた。まさかとは思うが、本気で客を取らせるつもりだろうか。

「フッ……奥さんが私の言うとおりにしているうちは大丈夫ですよ」

酒井は意味深な物言いをする、喉の奥でククッと低く笑った。

機嫌を損ねるようなことをしたら、売春させるといふ脅しかもしれない。レイプされただけでもショックなのに、そのうえ身体を売らされるなんて考えられない。恐ろしさのあまり、ますます逆らえなくなってしまう。

「それじゃあ、はじめますよ。まずは私にローションを塗ってもらいましょうか」

高圧的に命じられて、美帆はおずおずとマットのかたわらにしゃがみこんだ。そして洗面器のなかに手を入れて、ヌルヌルした液体を手で掬いあげる。

「こ、これを……塗ればいいんですね？」

男の脂肪だらけの胸板にトロロッと垂らし、言われるままに塗り伸ばしていく。

「いいですよ。その調子で全身をローションまみれにするんです」

「ううっ……こう、ですか？」

ローションのヌメリが気色悪くて、思わず眉間に皺が寄ってしまふ。それでも途中でやめるわけにはいかず、男の皮膚に手のひらを這わせていく。

胸板から腹部にかけてを、円を描くように柔らかく撫でまわす。すると、あつという間に薄汚い皮膚がヌメ光り、卑猥な雰囲気の色濃く漂いはじめる。

「ほうっ、なかなか気持ちいいですよ」

中年男の気持ちよさそうな溜め息が、生理的にどうしても受けつけられない。夫以外の男に奉仕していることを実感して、猛烈に嫌悪感が煽りたてられる。美帆は苦悩しながらも気持ちを奮い立たせて、懸命にローションを塗り続けた。

「奥さん、チンポはとくに入念にお願いしますね」

「や……いやらしいことばかり……もういやです……」

つい拒絶の言葉をつぶやいてしまうが、酒井は余裕の笑みを浮かべている。そして人妻を行為に引きこむために、譲歩したと見せかける条件を提示してきた。

「射精させれば終わりにしてあげます。だから一生懸命やってください」

「そんなことまで……ひどいです……うっうっ」

美帆は嗚咽しながらも覚悟を決めると、中年男の股間に手を滑らせていく。

すでに陰茎は激しくいきり勃ち、巨大な亀頭もパンパンに充血していた。ローションまみれの指を太幹に絡めると、火傷するような熱気が伝わってくる。ゴツゴツした異様な感触に怯えながらも、ゆっくりと指をスライドさせた。

（やだわ、こんなの……でも、お射精……させるまでだから……）

無意識のうちに熱っぽい溜め息をもらしてしまふ。青筋を立てている剛根は、すっ

かりローションでコーティングされて妖しく光り輝いていた。

美帆は気持ち悪いと思いつつ、この妙なヌルヌル感到に少しずつ没頭していく。逞しすぎるペニスを横目で確認しながら、中年男に気づかれないよう密かに内腿を擦り合わせていた。

「あうっ……ンンっ……」

ヌチャツという淫靡な水音が、股間の奥で微かに弾ける。

ローターで撪られ続けた蜜壺は、新たな華蜜を分泌してお漏らししたように濡れていた。敏感な粘膜はすっかり蕩けて、イソギンチャクのように蠢いている。とどめを刺されるのを待ち受けて、卑猥な蠕動を繰り返していた。

「くうっ……奥さんは筋がいい。力加減が絶妙ですよ」

男の声を頭の片隅で聞きながら、ローションのヌメリを利用してバットのような剛根を扱きたてていく。いつしか気色悪さは消え去り、手のひらを押し返してくる鉄のような硬さに圧倒されていた。

「ハア……ハア……ハア……はぁぁん」

自分の息遣いが荒くなっていることにも気づかない。白魚のような指を逞しい陰茎に巻きつけて、ヌチャヌチャとリズムカルにピストンさせていく。

大きく張りだしたカリを擦ると、膣壁を抉られたときの感触がよみがえり、華蜜がトロリと溢れだす。あの気が狂いそうな愉悦は、おそらく一生忘れることができないだろう。

「はぁあつ……さ……酒井さん……」

媚びた声が自分の唇からこぼれてハツとする。夢中になってペニスを扱っていたことを自覚し、顔が熱くなって見るみる赤面していく。

（ち、違う……違うの……そうじゃないの……晃司さん……）

慌てて夫の顔を思い浮かべると、心のなかで言いわけを繰り返す。

決して欲情などしていない。身体は穢されてしまったが、生涯愛する男性は一人だけ。どんなに焦らされようとも、自分から求めたりするはずがない。

しかし、狡猾な中年男が、人妻の艶っぽい声を聞き逃すはずがなかった。

「たまらなくなってきたんですね、奥さん」

「ま、まさか……私は……早く終わって欲しいだけです……」

視線をそらしてつぶやくけれど、ペニスはしっかりと握り締めていた。虫酸が走るほど嫌いな中年男の陰茎を扱くことで、妙な興奮を覚えているのは事実だった。

「フフッ、それでは次のレッスンに入りますか」

肥満体が妖しい液体ですっかりコーティングされると、酒井は片頬に笑みを浮かべて新たな要求を突きつけてきた。

「今度は奥さんの身体にもローションを塗ってください。足のほうからオッパイを擦りつけて、身体全体で奉仕するんですよ」

「ああ、そんなこと……」

美帆は双眸に涙を浮かべて、首を小さく左右に振った。そして悲しげな吐息をひとつ吐くと、ローションを掬いあげて自分の乳房にまぶしていく。

だって、この男に逆らうことは許されないから……。

お椀を双つ伏せたような乳房は、照明の光を受けて卑猥な光を放ちはじめ。男の視線が急に粘つくくなり、逃げるように足もとへと移動してひざまずいた。

(やるしかないの……だって、晃司さんと一緒にいたいから……)

焦らし責めで頭の芯が痺れているが、一途に夫のことだけを思い続けている。結婚生活を守るためには、涙を吞んで従うしかなかった。

逡巡しながらも前屈みになり、毛むくじやらの臍に乳房を押しつけていく。ローションがニチャッと弾けて、皮膚がヌルリと滑るのがわかった。

「そのまま、ゆっくりあがってきます。ちなみにこれは、『泡踊り』って言うん

ですよ。ソープで行われているサービスのひとつです」

余計な説明を聞かされることで、屈辱感がさらに膨れあがる。

（ああ、胸を使って奉仕するなんて……）

こらえきれない涙が溢れて頬を濡らす。それでも男の言葉に従い、這いつくばるような格好で身体を移動させていく。女の象徴である乳房が、中年男の毛臍から膝、そして太腿へと滑り、やがて屹立したペニスが目の前に迫ってきた。

「や……ど、どうしたらいいのですか？」

「オッパイの間でチンポをマッサージするように、身体をゆっくりと滑らせてください。柔らかいオッパイで挟むんですよ。『パイズリ』というやつです」

命じられるまま、淫らな奉仕に専念する。恐るおそる身体を滑らせて巨大な肉柱を押し倒すと、胸の谷間にぴったりと挟みこむ。羞恥と屈辱を嘔み締めて、身体を前後に揺すっていく。

「おおっ、いい感じですよ。やっぱり人妻の泡踊りは最高ですね」

「いや……もう許してください……」

男根の熱気が乳房に伝わり、思わず小声でつぶやいてしまう。夫のモノとはあまりにも異なる男根が、とにかく恐ろしくてならなかった。でも、乳肌でじかに触れてい



ると、気色悪さよりも男らしい逞しさを覚えてしまうのはなぜだろう。

「旦那さんに知られたくないでしょう？ だったら続けるんです……おおうっ」

男の呻き声が気色悪いが、中絶するわけにはいかない。恥ずかしい行為を強要されていることを、愛する夫にだけは知られたくなかった。

(でも……本当にこれでいいの？ 晃司さん……)

心の奥底にふと疑問が浮かびあがる。こんなことをして、本当に結婚生活が守れるのだろうか。もしかしたら、破滅への道を進んでいるのではないだろうか。

終わりのない屈辱と陵辱が、貞淑でありたいと願う新妻の心を責め苛んでいた。

「はぁ……ンンっ……はンンっ……」

やたらと広い浴室に、美帆の艶っぽい息遣いが反響する。

熱を持ったペニスを集中的にマッサージさせられて、全身が汗ばむほど熱く火照っていた。それでも中年男の肥満体の上に四つん這いになり、身体を前後に動かしていく。すると、嫌でも乳首が擦れて硬く尖り勃ってしまう。

「奥さん、もっとしっかりやらないと、いつまで経っても終わりませんよ」

酒井は相変わらず呻いているが、いっこうに射精する気配はない。それどころかペニスをますます硬化させて、柔らかい乳房を押し返してくるのだ。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはこころみ。お手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>